

「趣味」の調査本徹底

「ニッポン・クルー」

続・Uボートの記憶

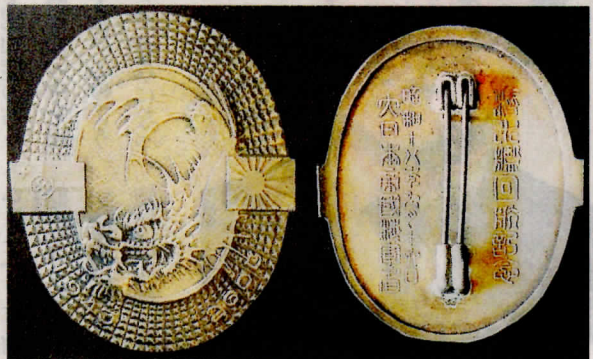
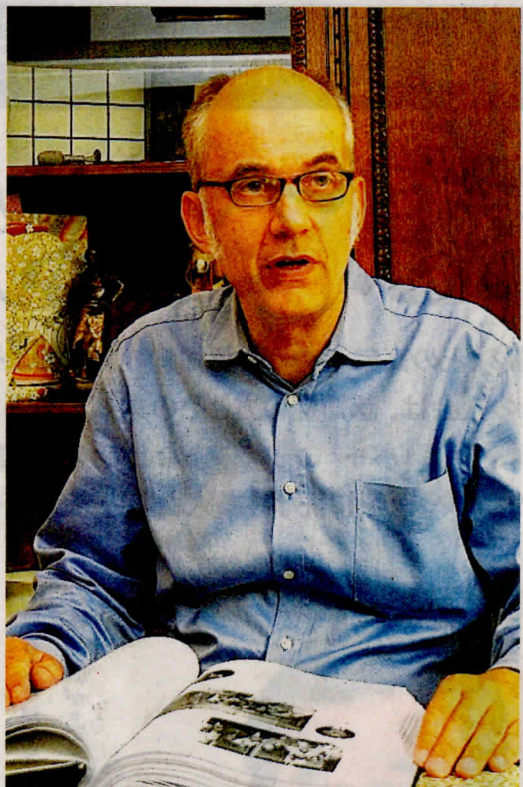
7

呉市の大和ミュージアムに、ドイツ語で書かれた「著書」がある。作成途中で、まだ製本されていない。表題は「富士山の影にて」。副題には「東アジアにおけるドイツの船乗りと兵士たち 第一部 作戦基地と艦隊部隊1939〜1945年」とある。

収集家の研究

440ページほど。43年8月、ドイツ海軍基地から呉港に回航された潜水艦「U511号」に関する詳細な記述や多数の写真が掲載されている。昨秋、編集者のアクセル・ドレンバッハさん(50)が同館に立ち寄り、寄贈したという。ドイツ西部、ライン川沿いにある商都デュッセルドルフに住むドレンバッハさんを訪ねた。大学で日本学を勉強し、2年間の日本への留学経験もある。

妻の母が日本人で、岡山市に住んでいた。昨年9月、家に「留学中、在日ドイツ人から第2次大戦中の暮らしを聞き、おもしろいから本にまとめた」と思った。まだ完成していないが、大和ミュージアムを見学後、「興味を持ってみてくれる人がいるかもしれない」と寄贈を思い立った。



U511号の呉港回航記念メダル

「誰かが記録しないと」

若いころ、近くの元海軍大尉宅に通った。戦時中、駐日ドイツ大使館の海軍主計大尉だったハインツ・プリスマイヤーさん(2006年死去)。交流を深め、98年ごろから2人で「富士山の影にて」の編集を始めたという。

「趣味」という編集だが、切手収集と同じように関係者の聞き取りから資料探しまで徹底している。3階建ての自宅の1階部分は「作業場」で、収集品が所狭しと保管されていた。

U511の元乗組員から譲り受けた日本回航の記念メダルは長さ5センチほど。長円形の表にしゃほこが描かれ、裏には「潜水艦回航記念 大日本帝国海軍省」と刻印されている。

このほか、同艦乗組員が着用した夏の制服、便乗した野村直邦・海軍中将(73年死去)が関係者に贈った記念品のたばこ入れ、ドイツ海軍関係者が日本で使った木製の「公用外出門鑑」などが並ぶ。ちょっとした私設資料室のような趣だ。

90年代末から「ニッポン・クルー」の世話役だったウィルヘルム・オスターフェルトさん(13年死去)を通じて、U511の元乗組員らとも交流を重ねた。

「ニッポン・クルー」の存在は、以前から知っていた。戦時下から占領期にかけて日本に滞在し、強制帰国させられた人たちの集いは50年代からあったが、ニッポン・クルーが定期的に会合を開くのは80年代から。2007年9月のハンブルクが最後で、23人が出席した。

執筆中の第一部の完成は2年後の見込み。さらに第2部、第3部と編集を続けるという。いずれも出版せず、インターネット上で公開する考えだ。精魂を傾ける理由を尋ねると、「戦時中の世代の暮らしに興味を持ち、事実を記録する。誰かがそういったことをしないと、次の世代では何も分からなくなる」と答えた。



戦時中、ドイツ海軍関係者に渡された「公用外出門鑑」

六甲山「抑留」の日々

「ニッポン・クルー」

続・Uボートの記憶

8

大阪湾を見下ろす神戸・六甲山に、廃屋となった元ホテルがある。「六甲オリエンタル」



敗戦後の足取り

「六甲オリエンタル」の名で、1934(昭和9)年から43(同18)年まで開業。戦後、再開されたが、2007年6月に営業終了した。ドイツ潜水艦「U511号」で呉港に回航し、日本で敗戦を迎えた元乗組員らは占領下、このホテルで「抑留」の日々を送った。

「オリエンタルホテル」30年の歩みには、「阪神電気鉄道が六甲山上所有地に建設せる(中略)夏季ホテルの経営を開始」と記述。戦時下、「統制経済下の材料入手が困難に至り」廃業となった。

同ホテル跡地から西約2kmにある六甲山ホテルは29(昭和4)年、後に阪急グループに入る宝塚ホテルの別館として建設。夏季だけ営業した。43年7月に営業休止し、戦後の51年に再開した。同グループ

「もともと視力が悪く、海軍には入れなかった。領事館の命令で事務所を手伝い、44

神戸市文書館の話では、六甲山のホテルでドイツ人が抑留されていたことを伝える資料はほとんど残されていないという。

敗戦時、関西のドイツ人Ⅱは約700人いたとみられる。その一人で神戸市東灘区に住むワルター・レファートさん(90)はU511の元乗組員らと六甲山に滞在した。

神戸生まれで、戦時中、同市のドイツ海軍事務所働いていた。

ホテル二つ接收 宿舎に



日本で敗戦を迎えたドイツ

ドイツ商人は江戸時代末に来日。1900年代初めから滞日家族が増え、浜や神戸にドイツ学校が設けられた。戦時下、日本在住者は推定約3千人。このうち約600人はインドネシアから帰国途中、日本で敗戦を迎えた「商婦人」とその子ら。戦時下は主に横浜、箱根、河口湖畔、六甲山周辺に住。日本政府から食料が支給されたが、ドイツの仮装巡洋艦が連合国軍商船から奪った物品も「特別配給」された。47年2月、第1陣が米軍輸送船「マリン・ジャンパー」で、同8月第2陣が同「ジェネラル・ブラック」で帰国。日本にとどまったのは、古からの滞日者やユダヤ系ドイツ人700~800人とされる。

年10月に正式にスタッフになった。神戸で修理する潜水艦と造船会社の連絡役などを担った。

ドイツ海軍兵士が琵琶湖などに休養に行くと、通訳で付き添った。潜水艦が大阪湾で試運転するときも同乗。神戸への空襲が激しくなった45年6月ごろ、六甲オリエンタルホテルに収容されたという。

「一部は六甲山ホテルに入った。山頂は自由に外出できたが、下山は許可が必要だった」。戦時中、日本海軍はこの二つのホテルを接收し、ドイツ海軍の宿舎に提供したらしい。

六甲山では森の木を伐採して薪を用意したり、有馬にあった貯蔵庫から食料を運んだ。坂道が多いから馬を1頭買い、馬車を仕立てて1週間に一度、貯蔵庫に通った。缶詰がいっぱいあった。

ホテルでは、「ニッポン・クルー」の世話役だったウィルヘルム・オスターフェルト

さん(故人)やU511の元乗組員エミール・ワグナーさん(91)「ドイツ在住」と過ごした。

敗戦直後の45年9月、帰宅が許された。一家はドイツに送還される可能性もあったが、占領軍の判断で国内滞在を許されたという。

戦争末期、2歳上の兄ハンスさんは「反ナチス」と見られてスパイ容疑をかけられ、横浜で投獄された。戦後に釈放されたが、結核を患って49年、28歳で亡くなった。

レファートさんは「毎年、終戦記念の式典を続ける日本はいいと思う」と語り、こう続けた。

「兄は戦争の犠牲者の一人かもしれない。第2次大戦とともに敗戦した日独は、戦争の悲惨さを忘れてはいけない。軍隊を使わず、率先して平和な世界をつくっていく責務がある」

(この連載は中川正美が担当しました)



①六甲山で「抑留」中のドイツ元兵士ら＝アクセル・ドーレンバッハさん提供
②戦後、営業再開した当時の六甲オリエンタルホテル＝阪神電鉄提供



戦時中、Uボートの元乗組員らと六甲山のホテルで過ごしたワルター・レファートさん＝神戸市中央区北野町の神戸外国倶楽部